２．長崎遺跡（ながさきいせき）（３～５区）

所 在 地：福井県坂井市丸岡町長崎
調査原因：福井港丸岡インター連絡道路改良事業
調査期間：令和２年５月１日～11 月 30 日
調査主体：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
調査面積：３区　　3,940 ㎡
　　：４・５区　1,060 ㎡
時　　代：古墳時代前期、古代（奈良・平安時代）
　　中世（鎌倉・室町時代）、近世

位置図（S＝1/50,000）

調査の概要　長崎遺跡は、坂井平野南東部、旧北陸道沿いの交通の要衝に立地します。中核の称念寺(長崎城跡)を中心に､鎌倉時代後期から室町時代中期にかけて寺内町が形成され、地域の商品流通の拠点となった遺跡です。称念寺は、鎌倉時代後期の正応３(1290)年以前から存在した寺院が時宗に改宗し、伽藍が大きくなったと伝わります。商業を盛んに行い､豊富な財力を基盤に室町時代(15 世紀中葉)には、将軍足利義政や後土御門天皇の祈願所としての地位を授かり繁栄します。しかし文明３(1471)年、戦乱による突然の火災から、長崎と称念寺は焼土と化しました。16 世紀になると､朝倉氏が長崎を戦略上の拠点に使うこともあり、町は再整備されたと考えられます。また、称念寺は朝倉氏により寺領が安堵され、江戸時代にかけて再び発展していきます。

発掘調査は、道路改良事業に伴い令和元年(2019)度から称念寺の南側の場所で実施しています。令和２年度の調査は、調査対象地の西半の３区と、東半の４・５区を行いました。

【３区】

遺構　古墳時代前期の溝１条のほかは、中・近世(鎌倉時代後期から江戸時代前期)の遺構です。３区の西側に、中世長崎の町を区画する堀があり、堀の東側に、屋敷境の区画溝８条以上、掘立柱建物６棟以上、井戸 13 基、溜枡２基など、多くの遺構があります。３区の中央付近に、南北から東西方向に折れて進む幅７～８ｍの道路があり、道路上には、15 世紀後半の火災によって生じた炭化物が広がり、火事場の廃材を捨てた穴も見つかりました。道路を境に、東と西では屋敷地が大きく変わります。西側の屋敷は、南北約 30m、東西約 10～20m の広さで、北側に中心的な掘立柱建物２棟と井戸・池がそれぞれ１基、南側に離れ的な掘立柱建物１棟と池１基が配置されます〈**写真５**〉。建物は何度も建替えされながら存続し、室町時代中期から江戸時代前期(15 世紀～17 世紀)にかけての屋敷と推定されます。東側の屋敷は、かぎ折れの区画溝が多重に巡る形をなし、東西 60m以上の敷地をもつ大きな屋敷の一部と考えられます〈**写真１**〉。３区東端には、掘立柱建物２棟と井戸５基があり、小規模な屋敷もあります。井戸のうち３基は素掘りで、残る２基は石組みの井戸です。出土遺物から、石組みの井戸は火災後の 16～17 世紀、素掘りの井戸は火災以前の 14～15 世紀に推定できます。

遺物　古代の須恵器・土師器が出土し、なかには赤彩された土師器の坏で古代寺院や役所

写真１　長崎遺跡３区全景（東から）

写真２　櫂状木製品と曲物

写真３　木桶の井戸

写真４　瓦質土器風炉

写真５　西側の屋敷付近の遺構配置状況

写真６　分銅

写真７　鈴

クラスの遺跡から出土する特殊な土器もみられました。

中・近世の遺物は、中国製の青磁碗・皿、白磁坏・皿、青白磁梅瓶、天目茶碗、瀬戸美濃焼の灰釉碗・鉢・卸皿、鉄釉壺・天目茶碗、珠洲焼壺、越前焼甕・壺・擂鉢、瓦質土器風炉・火鉢・擂鉢、土師質土器皿(かわらけ)、唐津焼、漆器碗、曲物、櫂状木製品〈**写真２**〉、下駄、漆塗糸巻きされた工具の柄、金属製分銅〈**写真６**〉、鈴〈**写真７**〉、飾金具、銅銭、硯、砥石などです。出土遺物の年代は 14～17 世紀と幅があるなか、15 世紀のものが大半を占めます。これは不意の火災に遭い、所持品が持ち出せなかったためと考えられます。瓦質土器の風炉という茶会で使われる移動式のコンロや、青磁や灰釉の碗、天目茶碗の多さが特筆されます。金属製の分銅は、主に商いに使用される竿秤のおもりで、壺形をなし、高さ 3.0 ㎝、幅 2.3 ㎝、重さ 65.4ｇを計測します。火事場整理の穴から出土しました。

【４・５区】

遺構　４区は、主に道路北側の側溝工事をする箇所を細長く調査しました。４区の中央付近にて、河川を検出しました。この川を境に東側は、地籍図や平成 28 年度の調査結果から低湿地と推定され、遺構は確認できませんでした。これに対し川の西側では、主に室町時代の溝８条、土坑３基、集石１基、杭列１基、柱穴多数など多くの遺構が見つかりました。この河川をもって称念寺を中心とする寺内町の東側の境になると考えます。

５区は、道路予定地の南側を調査しました。４区で見つかった河川が、５区では調査区の西端に延びていました。４区と同様に、川より東側には明確な遺構はありません。この川は、近世以後にほぼ全体が埋め立てられ、細い水路のみ近・現代まで残ります。川の西岸（町側の岸）は、15 世紀後半に起きた火災後に、炭や廃材を含む土砂によって埋め立てられ、16 世紀代の川の西岸を検出しました。川と同時期の区画溝が川の約５ｍ西側で止まり、そこから川にかけて、胴木の上に木樋を配した木組遺構(暗渠)が見つかりました〈**写真８・９**〉。木樋は、推定長 5.4m、幅約 25 ㎝を計り、この上に土塁が築かれた可能性が考えられます。

遺物　４区の主な遺物としては、中国製陶磁器、瓦質土器のほか、漆器〈**写真 11**〉、宝篋印塔、建築部材、大型の釘、壁土などがあげられます。

５区の主な遺物としては、15 世紀代の川底から出土した青磁碗〈**写真 10**〉、上層から出土した永禄元(1558)年と記された一石五輪塔などがあります。

まとめ

３区の掘から４・５区の河川にかけて、室町時代中期から江戸時代前期(15～17 世紀)の、区画溝、道路、屋敷が整然と配置される様子が明らかになりました。遺物では、多様な産地の陶磁器や、15 世紀に茶道具として流行した瓦質土器の風炉が豊富に出土し、商いに使われる竿秤の分銅も見つかりました。これらの成果から、中世の長崎では、商業活動を盛んに行った称念寺を中心に、文化的に高い暮らしを行う住人が屋敷を構え、多くの人や物が集まる地域経済の拠点となる町が発展したことが想定されます。　　(櫛部正典)

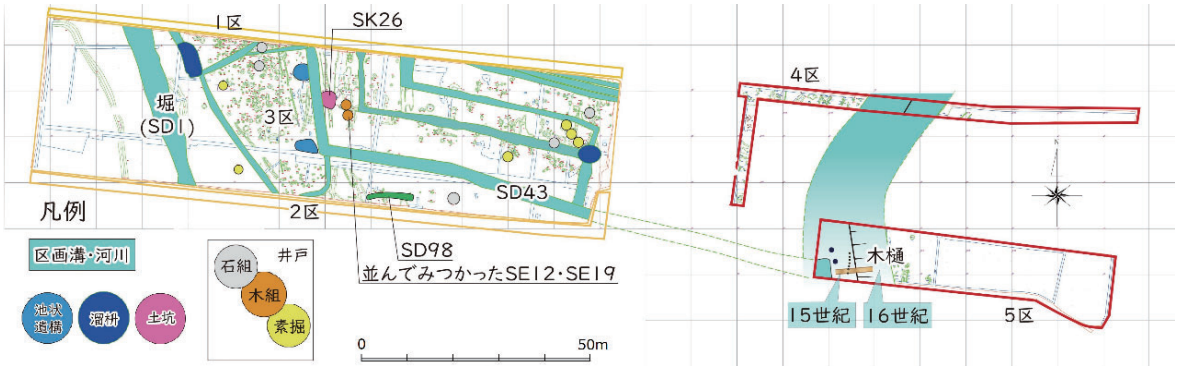

図１　長崎遺跡３～５区の遺構概要図

写真８　木組の暗渠（西から）

写真 10　５区出土青磁碗

写真 11　４区出土漆器

写真９　木組の暗渠（東から）

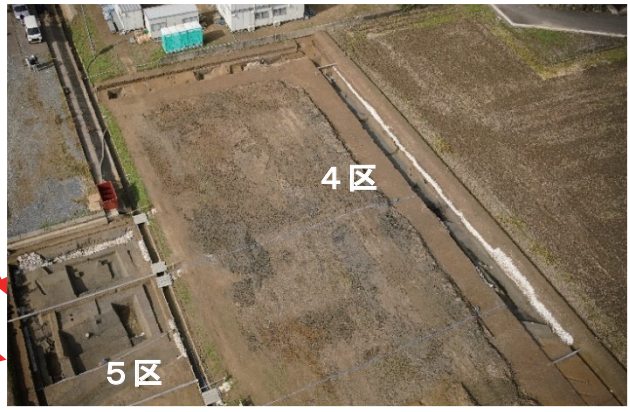

写真 12　長崎遺跡４・５区（東から）

写真 13　長崎遺跡３区遠景（西から）